
ELF 時代における「通じる英語」についての一考察*

鈴木 達也

要 旨

国際英語 (World Englishes) や共通語としての英語 (English as a lingua franca, ELF) といった概念が広く受け入れられている今日、日本における英語教育は大きく様変わりしてきたと言って良い。英語による英語の授業やタスク遂行型、コミュニケーション重視の授業が広く行われ、実用的な英語の習得を目指している。しかしながら、英語母語話者による英語の使用よりも非母語話者による英語の使用の方が多くなった現実を踏まえて英語の様々なバリエーションが認められるようになると、果たしてどのような英語を学ぶことが適切であるのかという問題が顕在化してくると同時に、「通じる英語」とはどのような英語なのかについて検討する必要性が生じてくる。本稿は、「通じる英語」をめぐる諸問題を踏まえつつ、そもそも日本の英語教育の目的とは何なのかについて検討するものである。

1. 序

近年、日本の初等・中等教育における英語教育は大きな変革を経験していることはよく知られている。授業スタイルについては、かつての文法・訳読式の授業スタイルから、主体的で対話的な授業スタイルへと変わり、タスク遂行型、コミュニケーション重視の授業が広く行われている。読解重視の英

語教育から実用重視の英語教育への転換であると言えよう¹⁾。この点については、鈴木（2018）にて、筆者は言語学の観点から批判的な指摘を行った。日本の英語教育が絶対的なインプット量が不足している EFL（外国語としての英語教育）コンテキストであるという点を考えれば、言語能力とコミュニケーション能力の違いや母語による負の転移について極めて慎重な検討が必要であると主張した²⁾。英語教育において、コミュニケーションが成立することを達成目標としてしまうと、文法の備わった人間言語としての英語の教育ではなく、単なる「英単語を用いたコミュニケーション」に陥ってしまう危険性があると主張した³⁾。

最近の日本の英語教育における変革として、達成目標の変化も重要な問題点として挙げることができる。かつてはアメリカ英語であれ、イギリス英語であれ、英語母語話者の英語に近づくことが目標であったと言えるが、昨今のように英語が非母語話者によって使用される割合が多くなってくると⁴⁾、自ずと目標とされる英語の姿についても変化が生じてくる。勅使河原（2014）も整理するように、英語の様々なバリエーションを容認する国際英語（World Englishes）や共通語としての英語（English as a lingua franca, ELF）といった概念が広く受け入れられている今日、日本の英語教育においても、目標とする英語はどのようなものであるべきかについては慎重に吟味すべきであるはずであるが、日本学術会議提言（2016：4）も指摘するように、英語の多様性をどのように英語教育に反映させるかという議論は十分なされているとはいえない⁵⁾。

この他にも最近の英語教育における大きな変革の例として、英語の授業を英語で行うこと⁶⁾、あるいは、小学校から英語教育を行うこと等⁷⁾、賛否が分かれる施策があるが、本稿では、特に英語の多様性への対応について焦点を当てて検討を行うこととする。具体的には、日本語母語話者に関する「通じる英語」をめぐる問題を取り上げる⁸⁾。

2. ELF と「通じる英語」

2.1 「通じる英語」

勅使河原 (2014) は, Jenkins (2000, 2007), Kachru and Smith (2008), 清水 (2011) 等, 多くの先行研究を踏まえて, 「通じる英語」についての研究の整理を行った。一口に「通じる英語」と言っても研究者によって理解が異なっており, 研究対象とする概念が定まっていない状態では, 議論がかみ合わなくなってしまう。勅使河原 (2014) は, Kachru and Smith (2008, 第 4 章) に言及して, 「通じる英語」の研究に関わる *intelligibility*, *comprehensibility*, *interpretability* という三つの段階について, それぞれ具体例を挙げて説明している。

intelligibility とは, 発話内の語や文レベルの要素を認識できるかどうかに関わる概念で, 例えば (1) が 7 語から成る発話であることが分かる状態のことを言う⁹⁾。

- (1) anyone lived in a pretty how town

一方, *comprehensibility* とは, 語の社会文化的背景における文脈的な意味のことを指し, 仮に発話が *intelligible* であったとしても意味を誤解して *comprehensible* な状態ではないことがあるとしている。例えば, イギリス英語とオーストラリア英語で意味が異なり得る *plate* を例に, オーストラリア英語話者が *bring a plate* 「料理を持参」と言ったのに対して, イギリス英語話者が「皿を持参」と解釈してしまう場合, *intelligibility* については問題ないが, *comprehensibility* のレベルで問題が生じているとしている。

三つめの *interpretability* とは, 発話の意図や目的の理解までも視野に入れた概念で, 例えば, (2) のような電話での対話がある時に, Sean が在宅している場合では, (2a) に対して (2b) で答えるのではなく, (2c) のように答える場合に *interpretability* が高いと考えている。

- (2) a. Is Sean there?
b. Yes, he is.
c. One moment please.

「通じる英語」に関わるこれら三つの概念は、コミュニケーションを重視する現在の英語教育を考える上で確かに重要なポイントであると言えよう。

2.2 言語の理解

清水（2011 :59）も紹介するように、Jenkins（2000 :132）は、最も理解しやすい英語は、同じ L1 を持つ人々の英語であると示唆している。生成文法における原理変数理論的な見方をすれば¹⁰⁾、我々は、発話を聞いて理解する際、純粹に物理的な音のみを基準にして理解をしているわけではなく、生得的な普遍文法（UG）と生後の経験によって変数が設定されることによって調整された目標言語（個別言語 PG）の無意識の音韻体系の知識に基づいて理解をするのであるから¹¹⁾、物理的に同じ音を聞いたとしても、頭の中にある音韻体系が異なれば異なる音として認識されることになる可能性がある一方、頭の中にある音韻体系が同じであれば同じ音として認識されることになり、結果として同じ L1 を持つ人々の英語の方が理解し易くなるというのもうなずけることである。

高山（2010）は、日本人英語学習者は母音を不必要に挿入してしまうがために正しく強勢の位置が決定されず、「通じる英語」にとっての障害となっていると指摘した。また、音節拍リズムを用いる日本語を母語とする英語話者が、強勢拍リズムを用いる英語に母語転移によって音節拍リズムを適用してしまえばリズムが崩れ、英語母語話者にとっては通じにくい英語になると考えられるが¹²⁾、これが話し手、聞き手ともに日本語母語話者であった場合は、必ずしも通じにくい英語とはなっていない可能性がある。これは、日本の英語教育が EFL コンテキストであることを考えると、日本語母語話者同

士で練習をした場合、正に日本語なまりの英語を容認することになるという意味で重要なポイントであろう。現在の日本の英語教育では、多くの場合、日本語母語話者の英語教員が英語で英語の授業を教えているわけであるが、必ずしもすべての英語教員が言語学、とりわけ英語音声学の専門的な訓練を十分受けているわけではない実情を考えれば、授業での使用言語を英語に限定する現在の英語教育は、「通じる英語」の視点からも大きな問題となり得るはずである¹³⁾。

2.3 多様性

言語学の世界では広く知られていることであるが一般の英語教員の間では必ずしも共有されていない問題の一つに、音韻規則の順序付けによってもたらされる発音の多様性の問題がある。(3) の例は地域によって発音上の方言差がある例である。

- (3) a. writing
b. riding

(3a) (3b) は、明らかに異なる単語であり、多くの日本人英語学習者は、発音も異なると考えている。しかしながら、英語母語話者の多くにとっては、実際の (3a) (3b) の発音は同じである可能性がある¹⁴⁾。

北アメリカ、特にアメリカ合衆国北東部やカナダの英語では、(4) のように /aɪ/ Raising と呼ばれる音韻規則があり、/aɪ/ という二重母音が無声子音の前で /ʌɪ/ に変化する。

- (4) /aɪ/ Raising
- $$aɪ \rightarrow \Lambdaɪ / ___ \begin{bmatrix} + \text{consonant} \\ - \text{voice} \end{bmatrix}$$

また、(5) のように、歯茎閉鎖音が母音に挟まれ、かつ後続する母音に強勢がない場合に歯茎閉鎖音が [ɾ] に変化する Flapping と呼ばれる規則がある。

(5) Flapping

$$\left[\begin{array}{c} +\text{alveolar} \\ +\text{stop} \end{array} \right] \rightarrow [\text{ɾ}] / [+ \text{vowel}] \text{ — } \left[\begin{array}{c} +\text{vowel} \\ -\text{stress} \end{array} \right]$$

北アメリカの多くの英語方言では、(5) の Flapping の規則が先に適用されるため、(3a) の /t/ も (3b) の /d/ も flap [ɾ] に変化する。その場合、[ɾ] は有声音であるので (4) の /aɪ/ Raising の適用環境が崩れて、(4) は適用されないことになるが、その結果、(3a) の writing も (3b) の riding も ['raɪɪŋ] となり、同じ発音がなされることになる。一方、(4) の /aɪ/Raising が (5) の Flapping よりも先に適用される地域（アメリカ合衆国北東部やカナダ）では、(3a) の writing の方だけが影響を受けて母音が /aɪ/ から [aɪ] に変化する。なぜなら、(3a) の /t/ は無声子音であるが (3b) の /d/ は有声音であるからである。

(5) の Flapping の規則については、母音が [aɪ] であろうと [aɪ] であろうと関係ないので、(3a) にも (3b) にも等しく適用されて /t/ も /d/ も [ɾ] に変化するることになり、結果として、(3a) は ['raɪɪŋ], (3b) は ['raɪɪŋ] という発音になることになる。ここで注目すべきことは、(3a) の writing と (3b) の riding の違いは歯茎子音が無声音か有声音か、すなわち、/t/ か /d/ かで区別がなされていると考えがちであるが、多くの母語話者にとっては、物理的な発音のレベルでは区別がないということと、区別がある方言を話す母語話者の場合でも、子音の区別ではなく、むしろ母音の違い、すなわち [aɪ] なのか [aɪ] なのかによって区別をしているという事実である。前節で述べたように、我々が発話を聞いて理解する際、純粋に物理的な音のみを基準にして理解をしているのではなく、無意識に持っている個別言語の音韻体系に

基づいて発話を理解しているということを思い出して欲しい。外国語教育の場合、理解の基となる目標言語の音韻体系が内在されていない状態であるので、特別な対応が必要となるのであり、どんな特徴が理解の鍵、あるいは手がかりとなっているのかを突き止めることが肝要である。

2.4 ELF 時代の英語教育

前節で、発話の理解のプロセスを考えた場合、目標言語の音韻体系が習得されているかどうかを重要であることを指摘した。本稿の冒頭で述べたように、日本の英語教育が目標とする英語はどのようなものであるべきかについて慎重に吟味すべきではあるにもかかわらず、英語の多様性をどのように英語教育に反映させるかという議論が十分なされていないという現状は、深刻である。RP (Received Pronunciation) のような具体的な英語の方言を想定して英語母語話者の文法を目標とする場合とは異なり、非母語話者が英語を用いるケースが増加していることを考慮してコミュニケーションが成立することを第一とするアプローチは、人間言語の本質から考えた場合、非常に問題が多い。フォーマルな英語であれ、インフォーマルな英語であれ、英語という人間言語の質を保持させるためには文法¹⁵⁾が必要であるが、外国語教育の場合、「インフォーマルな英語＝文法をおざなりにした英語」となってしまう危険性があり、注意が必要である。

一つ例を挙げると、インフォーマルスタイルでよく見られる削除現象について、日本語による母語干渉の影響もあってか、主語を自由に削除してしまう学生がいる。(6) は、インフォーマルスタイルで助動詞 do (does, did) を削除した例であるが、(7) のような例が主語と助動詞の縮約現象が関係した例であると認識している学生は非常に少ない¹⁶⁾。

- (6) a. You want some coffee?
b. Last night's party go well?

c. She like a new house?

(7) Want some coffee?

(6a) - (6c) の例文は、一見平叙文を上昇イントネーションで発音する疑問文のように見えるかも知れないが、(6b) の last night という過去を表す表現と (went ではなく) go が共起していることや、(6c) で主語が三人称単数の she であるにもかかわらず動詞 like に -s が付いていないことから明らかに、実は (8) のように do や did, does が省略された例である。(二重取り消し線は削除を示している。)

(8) a. ~~Do~~ You want some coffee?

b. ~~Did~~ Last night's party go well?

c. ~~Does~~ She like a new house?

このように、インフォーマルスタイルではよく見られる削除現象ではあるが、(7) がインフォーマルスタイル故に助動詞の do と主語の you が自由に削除された例であるかと言えば、そうではないことは、(9) のように主語だけを削除した例が容認されないことから明らかである。

(9) a. *Do want some coffee?

b. *Do ~~you~~ want some coffee?

英語では、たとえインフォーマルスタイルであったとしても、日本語とは異なり、自由に主語を削除することはできない。

では、なぜ (7) が言えるかという点、(10) に示すように、縮約によって主語が助動詞と一体化した場合に、助動詞が削除されるのと一緒に一体化した主語も削除されるというのが (7) を派生するメカニズムである。

- (10) a. Do you want some coffee?
b. D'you want some coffee?
c. ~~D'you~~ Want some coffee?

(10c) では、(10b) に示すように、助動詞 do と主語の you が縮約によって一体化し、その一体化された D'you が削除されているのであって、決して自由に主語の you が削除されているわけではない。

このように、インフォーマルスタイルであっても厳密な文法が関与しているわけであるが、もしも文法を無視した形で削除を行ってしまうと、英語によるコミュニケーションではなく、「英単語を用いたコミュニケーション」に陥ってしまう危険性がある。「通じる英語」と英語の多様性の問題は、発音に限ったことではないのである。

3. 英語教育の目的

これまで、英語の多様性にどのように向き合うかという視点で話を進めてきたが、次に、より本質的な問題についても検討したい。一部の例外を除いてあまり議論されることがないが、英語教育の改革において、そもそもなんのために英語を学ぶのかについて考えることが欠如しているように思われる。

森住他編（2010：4）が指摘するように、日本における学校教育の究極的な目的が「人格形成と人類の恒久平和への貢献」であるのなら¹⁷⁾、実用面に焦点を当てた現在のコミュニケーションを重視する英語教育は、結果を急ぐあまり、本質を見失いかけていえるかも知れないのである。日本学会会議提言（2016）も指摘するように、現在、日本国内で英語が必要とされる職場や機会は極めて限られている現状を考えれば、むしろ、英語を学ぶことを通して気付き、身に付ける他文化への理解、共感や国際感覚であることの

方が重要なのではないであろうか。「通じる英語」を習得するという面は、日本の英語教育が EFL コンテキストである以上、絶対的な練習時間が不足しているのであるから、限られた時間の中で配分する時間を考えた場合、実用的な練習に時間を多めに費やすことはあまり得策とは思えない。ましてや、特別な訓練を受けたわけではない日本語母語話者教員が英語で英語の授業を行うことは、あまりにも問題が多過ぎると言わざるを得ない。

ところで、英語教育の目的の問題は、最近の人工知能やそれを用いた機械翻訳機の性能向上の話題とも関わってくる問題である。現時点では翻訳の正確性の面でまだ大きな課題があるように思われるが、技術の進歩とともにそれらの課題も近い将来、実用的なレベルにまで克服されるであろうことは間違いない。SF ドラマに登場するような人体内蔵型の Universal Translator が登場する日も遠くないのかも知れない。そのような視点から英語教育を眺めた場合、もしも英語教育の目的がコミュニケーションを可能にすることであるのであれば、技術革新によって英語を学ぶ必要がない時代が来ても不思議ではない。2.1 節で触れた *intelligibility*, *comprehensibility*, *interpretability* のすべての面において、人工知能やそれを用いた機械翻訳機の方が、我々人間を凌駕する可能性が高く、英語教育そのものの意味が失われてしまうであろう。しかしながら、もしも英語教育の目的がコミュニケーションの達成ではなく、森住他編（2010：4）が言うように「人格形成と人類の恒久平和への貢献」であるのなら、人工知能やそれを用いた機械翻訳機の性能がいくら向上しようとも、それは英語教育の目的とは関係なく、大切なことは、学習者自身が英語を学ぶ過程で自らが成長することであり、その結果、多文化共生が求められる国際社会の中で、本当の意味での「通じる英語」によるコミュニケーションが可能となってくるはずである。

4. まとめ

国際英語（World Englishes）や共通語としての英語（English as a lingua franca, ELF）といった概念が広く受け入れられている今日、日本における英語教育は大きく様変わりしてきた。英語による英語の授業やタスク遂行型、コミュニケーション重視の授業が広く行われ、実用的な英語の習得を目指している。しかしながら、英語の様々なバリエーションが認められるようになると、どのような英語を学んだら良いかという問題が顕在化してくると同時に、「通じる英語」とはどのような英語なのかについて検討する必要性が生じてくる。本稿では、清水（2011）、勅使河原（2014）等の先行研究を踏まえつつ、「通じる英語」をめぐる諸問題を検討し、そもそも日本において英語を学ぶ目的とは何なのかについて検討を行った。

注

＊本研究は、2018 年度南山大学外国語学部特別配分研究費による助成を受けて行われたものである。

- 1) 日本学術会議提言（2016）「ことばに対する能動的態度を育てる取り組み—初等中等教育における英語教育の発展のために—」他参照。
- 2) 長谷川（2015）ならびに日本学術会議提言（2016）他も参照されたい。
- 3) 酒井（2002：32）は、人間とチンパンジーとの間で「コミュニケーション」が成立していても、そこで使われている「言語」には文法がなく、人間言語とは質的に大きく異なったものであることを指摘している。
- 4) 日本学術会議提言（2016：2）によれば、英語母語話者数が約 3 億人であるのに対して、英語を日常的に使用している非母語話者数は、約 4 億人から 6 億人いると推計されている。
- 5) もちろん、英語の多様性をどのように英語教育に反映させるかという議論が全くなかったわけではなく、例えば、勅使河原（2014）も紹介するように、清水（2011）は、共通語としての英語の観点から英語の通じやすさを検討した

Jenkins (2007) を踏まえて、日本語母語話者のためのガイドラインの試案を提案している。

- 6) 本件については、2.2 節参照。
- 7) 加藤・鈴木 (2018) は、日本語と英語の音声の違いへの気付きは、小学校から英語を学び始める児童にとって、「通じる発音」を身に付ける重要な第一歩であるとして、指導の具体例を示している。
- 8) 「通じる英語」あるいは「通じる英語発音」の問題については、例えば、高山 (2010)、勅使河原 (2014) 参照。
- 9) ここに挙げた勅使河原 (2014) の *intelligibility*, *comprehensibility*, *interpretability* の例は、いずれも Kachru and Smith (2008, 第 4 章) からの引用である。なお、Kachru and Smith (2008: 61) には、(1) の例は 6 語から成る発話であると書かれており、勅使河原 (2014: 41) にもそのように書かれているが、実際には 7 語から成る発話である。
- 10) Chomsky (1981, 1995), White (2003) 等参照。
- 11) 多少不正確な表現ではあるが、我々は発話を理解する際、いわば「心の耳」で発話を聞いているとも言える。
- 12) 音節拍リズムと強勢拍リズムについては、例えば窪園・太田 (1998) を参照されたい。
- 13) 日本学術会議提言 (2016) においても、「英語による英語の授業」に対する問題点が指摘されている。
- 14) 本節の説明は、Fromkin et al. (2000: 566-570) に基づいている。
- 15) ここでいう「文法」とは、統語論、意味論、音韻論のすべてを含む広い意味での「文法」のことを指している。
- 16) この部分は、Akmajian et al. (1984) 第 7 章に基づいている。例文も同章からの引用である。
- 17) 教育基本法やその基となる日本国憲法の精神に立ち戻って英語教育の目的について検討する必要がある。例えば、教育基本法の冒頭には、次のように書かれている。

教育基本法 (平成十八年十二月二十二日法律第二百十号)

教育基本法 (昭和二十二年法律第二十五号) の全部を改正する。

我々日本国民は、たゆまぬ努力によって築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献する

ことを願うものである。

我々は、この理想を実現するため、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。

ここに、我々は、日本国憲法の精神にのっとり、我が国の未来を切り拓く教育の基本を確立し、その振興を図るため、この法律を制定する。

第一章 教育の目的及び理念

(教育の目的)

第一条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

(教育の目標)

第二条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

- 一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
- 二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。
- 三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
- 四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。
- 五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

参考文献

加藤みゆき・鈴木達也(2018)「日本語と英語の違いへの気付き—小学校英語教育と大学英語教育の接点—」,『アカデミア』文学・語学編, 第103号, 南山大学, pp. 241-257.

- 窪蘭晴夫・太田聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』. 東京: 研究社.
- 酒井邦嘉 (2002) 『言語の脳科学: 脳はどのようにことばを生みだすか』 (中公新書 1647) 中央公論新社.
- 清水あつ子 (2011) 「国際語としての英語と発音教育」『音声研究』第 15 巻第 1 号, pp. 44-62.
- 鈴木達也 (2018) 「タスク遂行重視, コミュニケーション重視の英語教育と第二言語習得におけるパラメータ再設定」, 『アカデミア』文学・語学編, 第 104 号, 南山大学, pp. 1-17.
- 高山芳樹 (2010) 「通じる英語」を目指した発音指導の在り方. 『英學論考 39』pp. 87-104.
- 勅使河原三保子 (2014) 「日本語母語話者の『通じる』英語発音とは—intelligibility に関する研究の整理—」駒澤大学外国語論集, 17, 39-54.
<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/34113/rgs017-02-teshigawara.pdf>
(2019 年 1 月 2 日参照)
- 日本学術会議提言 (2016) 「ことばに対する能動的態度を育てる取り組み—初等中等教育における英語教育の発展のために—」日本学術会議 言語・文学委員会 文化の邂逅と言語分科会. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t236.pdf> (2017 年 8 月 3 日参照)
- 長谷川信子 (2015) 「英語教育における母語 (日本語) 教育の必要性和重要性—タスク遂行型言語教育の限界を見据えて」『日本語/日本語教育研究』第 6 号, pp. 6-20. ココ出版.
- 森住衛他編 (2010) 『大学英語教育学: その方向性と諸分野』(英語教育大系第 1 巻, 大学英語教育学会監修, 大修館).
- Akmajian, Adrian et al. (1984) *Linguistics: An introduction to language and communication*. Second edition. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding: The Pisa lectures*. Dordrecht: Foris Publications.
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Fromkin, Victoria A. et al. (2000) *Linguistics: An introduction to linguistics theory*. Malden, Blackwell.
- Jenkins, Jenifer (2000) *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.

- Jenkins, Jenifer (2007) *English as a lingua franca: Attitude and identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Kachru, Yamuna and Smith, Larry E. (2008) *Cultures, contexts, and world Englishes*. New York: Routledge.
- White, Lydia (2003) *Second language acquisition and universal grammar*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.